

# 藝大通信

特集 21世紀のミュージアム 大学美術館  
大学美術館への提言 辻井喬 陰里鐵郎  
ようこそ大学美術館へ

NEWS 国際文化交流シンポジウム開催 前田耕作  
開かれた大学 小泉文夫記念資料室  
学生のいる風景 平成13年度 卒業演奏会

04  
OCTOBER  
2002

TOKYO  
GEIDAI  
東京芸大広報誌



「乾漆盛器」

### 増村紀一郎（ますむら・きいちろう）

1941年東京都生まれ。1967年東京芸術大学美術学部工芸科卒業、69年大学院修了。82年美術学部工芸科助手。講師、助教授を経て97年から教授。2002年紫綬褒章受章。「乾漆盛器」は1988年伝統工芸展出品。器の素地は、奈良時代の仏像制作に用いられた乾漆技法で制作。軽量で気温や湿度の変化にも狂いや歪みがないといった特徴をもつ。放射状の線模様は、円盤の周囲に朱漆を付け回転させながら描かれた。

### 東京芸術大学広報誌 藝大通信第4号

編集発行 東京芸術大学広報委員会

編集委員 野田暉行（副学長・音楽学部作曲科教授）

長谷部浩（美術学部先端芸術表現科助教授）

渡邊健二（音楽学部器楽科助教授）

永井の夫（事務局長）

アートディレクター 蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）

制作 株式会社 平凡社

発行日 平成14年10月31日

#### お問い合わせ先

東京芸術大学総務課

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8

電話 03-5685-7509 FAX03-5685-7760

e-mail jkikaku@off.geidai.ac.jp URL http://www.geidai.ac.jp

#### 第4号目次

## 特集 21世紀のミュージアム 大学美術館

### 3—9 大学美術館への提言

大学美術館と奏楽堂の役割 辻井喬

刺戟ある場としての大学美術館 陰里鐵郎

〈提言〉に答えて 竹内順一

### 10—15 ようこそ大学美術館へ

大学美術館コレクション10選

### 16—17 NEWS 2002.6～2002.9

国際文化交流シンポジウム開催 前田耕作

### 18—19 タイムカプセルに乗った芸大

【第4回】1931～1940年

佐藤道信 〈東京美術学校1932年〉

瀧井敬子 〈東京音楽学校1932年〉

### 20—21 開かれた大学④

東京芸術大学音楽学部小泉文夫記念資料室

柘植元一

### 22—23 学生のいる風景④

2002年新卒業生紹介演奏会

自由を表現することへの挑戦 真部裕

芸大短信2002.11～2003.2

### 24—25 秋から冬への大学美術館

鍛金 伊藤廣利の世界／二箇所—絵画場から絵画衝動へ—／

BREEZE（ブリーズ）宮下安弘

### 26—27 秋から冬への奏楽堂

オルガン+αシリーズ／芸大定期邦楽第65回演奏会

# 藝大通信

No.04

TOKYO GEIDAI

東京芸術大学広報誌

## 第4号刊行にあたって

一大学が美術館と音楽ホールを併せ持つ例は、おそらく世界的に見ても極めて希有なことに違いありません。

芸大美術館と奏楽堂は、芸大から社会への発信拠点として、平山学長の提唱による「上野文化ゾーン」の一翼として、また、学内の重要な教育拠点として、その機能を果たすとともに、日々活発な活動を展開しております。さらに今後、将来構想の中枢機関として大いなる役割を担うことになるでしょう。

今秋、美術館は創立3周年を、(新) 奏楽堂は創立4周年を迎えます。

各種催し物については、これまでこの芸大通信でご案内して参りましたが、一つの節目として、今号と次号では、これら施設のご紹介を兼ねつつ、大学が運営するこういった施設を取り巻く諸問題と未来像について考察することにいたしました。

まずは、このところ「アフガン展」「ウィーン美術史美術館展」と大きな催し物が続く美術館を特集いたします。市井の施設とはまた異なった独自の側面が浮き彫りになるのではないかと思います。

お忙しいなか、貴重なご高見ご助言をお寄せくださいました辻井先生、陰里先生をはじめ、原稿をご執筆くださいました各位に厚く御礼申し上げます。

編集部ではまた、皆様からのご意見をお待ちしております。郵便、Fax、メールいざれでも結構です。どうぞお寄せください。

藝大通信編集委員長  
副学長（企画担当）  
野田暉行

# NEWS

2002.6～  
2002.9

平成十四年七月二十九日、アフガニスタンの貴重な文化財保護に関する世界的な世論の構築に資するため、国際文化交流シンポジウム2002「アフガニスタンの文化—東西文化交流と仏教文化—」が奏楽堂において開かれ、約九〇〇人が参加した。

## 国際文化交流 シンポジウム開催 奏楽堂から 世界的世論の喚起

### アフガニスタン文化支援へのメッセージ | 国際シンポジウムから |

前田耕作

二〇〇二年一月、アフガニスタンの復興を支援する東京会議で世界各国はそれぞれ具体的な支援内容を発表した。日本政府は「難民の再定住、地雷除去、医療、教育」など復興に向けて不可欠なプロセスと未来を担う人づくりに支援の重点を置くと表明した。

フランス政府は「教育、保健、農業、国家再建、市民社会支援、文化遺産の保護」の六部門を支援対象と特定し、春、すぐさ

カブル会議の主要な目的は、アフガニ

スタン国内の文化遺産、遺跡、博物館の現状に関する情報の交換と、緊急および長期の遺産保護を目的とする対策の骨子の策定としては六名の専門家たちを現状調査のため五月初旬に現地に送り、五月末にカブールで開催された「アフガニスタン文化遺産復興国際セミナー」に備えた。この対応の素早さは、文化復興が和平プロセスのなかで果たす役割の重要性を深く認識するフランスのある三つの谷を環境もろとも文化ゾーンとして保存・保護することの重要性を主張

#### プログラム

##### ●第1セッション

基調講演：平山郁夫（東京芸術大学長）

松浦晃一郎（ユネスコ事務局長）  
ジャン・フランソワ・ジャリージュ  
(フランス・ギメ国立東洋美術館長)

##### ●第2セッション

テーマ：東西文化交流とアフガニスタンの仏教文化の展開

コーディネーター：前田耕作（和光大学教授）  
発表者：ポール・ベルナール（フランス学士院会員）／ゼマルヤライ・タルジ（ストラスブル大学教授）／宮治昭（名古屋大学教授）／田辺勝美（中央大学教授）

##### ●第3セッション

コーディネーター：前田耕作教授

パネリスト：ピエールカンボン・ギメ国立東洋美術館部長／タルジ教授／ベルナール氏／土谷遙子（元上智大教授）／宮治昭教授／田辺勝美教授

主催 東京芸術大学、ユネスコ、日本ユネスコ国内委員会、社団法人日本ユネスコ協会連盟、朝日新聞社

後援 外務省、文化庁、NHK、文化財保護振興財団、芸術研究振興財団

協力 国際交流基金、全日空、全日空ホテルズ、電通

大学院音楽研究科学生による弦楽四重奏の奏楽で始まり、平山学長、松浦ユネスコ事務局長の主催者挨拶、遠山文部科学大臣、松浪外務大臣政務官、ラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣の祝辞の後、外国人留学生による民族音楽と踊りが披露された。

**◆スミソニアンと交流協定**  
七月三十日、米国スミソニアン機構のフリーラ美術館との間に交流協定を締結した。今後は、両者間に調整委員会を設け、研究者交流などの事業を進めていく予定。

交  
流

受  
章  
・  
受  
賞

運  
營

◆山本邦山教授が人間国宝

七月八日、山本邦山教授（邦楽科八は、重要無形文化財保持者（人間国宝）として認定された。

◆運営諮詢會議を開催

六月二十八日、平成十四年度第一回運営諮詢會議を開催し、議長、副議長を再選出した。国立大学を取り巻く現が説明されたのち、本学における大学改革の推進について活発な意見交換が行われた。

議長	樋口 廣太郎
副議長	鳥居 泰彦
海老沢 勝二	日本私立学校振興・共済事業団理事長

日本放送協会会長

日本私立学校振興・共済事業団理事長

日本放送協会会長

された。

七月三十日、東京全日空ホテルで日米仏三国の美術館等の関係者からなる「国際交流懇談会」を主催した。

懇談会では、本学学長を議長として考古資料から現代美術にいたる幅広い文化財・美術品の保存修復を中心とした現状と、人材育成や国際交流事業実施に際しての事前の情報交換やコミュニケーションの重要性などについて活発な意見交換が行われた。特に美術品の収集や保存方法が各国共通の課題として浮かび上がった。

また、このような交流の機会を重ねていべき必要性について意見の一致を見た。

# 「日米仏 国際交流懇談会開催」



二〇〇二年夏、東京芸術大学で開催された「アフガニスタン 悠久の歴史展」と「アフガニスタンの文化 東西文化交流と仏教文化」をテーマに掲げた国際シンポジウムは、こうした大きな歴史的うねりを積極的に受けとめて、日本が文化にかかわってアフガニスタンの歩みに深く足を踏み入れる初めての試みであったといえよう。それはまた、越境的な眼差しなくして文化など語ることはできないことを学ぶ機会でもあった。シンポジウムに参加したフランスのパネリストはすべてカブール会議に出席したメンバーであり、アフガニスタンをフィールドとしてながく活躍してきた学究たちであつた。彼らはヘレニズムから仏教にかかる遺跡までを広く深く論じつつ、複合的なアフガニスタン文化の独自性と普遍性をきわめて具体的に語った。アイ・ハヌム遺跡を発掘

したポール・ベルナール氏の驚くべき発見かつてアフガニスタン考古研究所の責任者としてハッダの仏教遺跡の科学的発掘の指揮をとったゼマルヤライ・タルジ氏の仏像の起源をめぐる言説などが印象的であつた。日本側はバーミヤン遺跡を中心としてそれぞれ個性溢れる議論を展開して氣を吐いた。プレゼンテーションを含んで四時間におよぶ長いシンポジウムにもかかわらず、多くの人たちが変転するアフガニスタンの歴史にじっと耳を傾け、その文化の多様な姿に熱く心をゆさぶられていた。そして参加したすべての人が、このシンポジウムが「アフガニスタンの貴重な文化財保護に関する世界的な世論」喚起の発火点になることを願つたに違いない。

(まえだ・こうさく／和光大学教授・アフガニスタンの復興を支援する東京会議コーディネーター)

◆学校邦楽教育フォーラム

七月二十八日に第一回「学校邦楽教育フォーラム2002」を奏楽堂で開催した。午前中に邦楽美技研修、午後からフォーラムが、全国から小・中・高校・大学の音楽教員、教育委員会関係者、邦楽教育関係者など約三〇〇名が参加して行われた。

◆天皇皇后両陛下行幸啓

七月二十九日、天皇皇后両陛下が大

悠久の歴史展」をご鑑賞になられた。両陛下は、遠山文部科学大臣らのお出迎えを受けた後、バルセロナ、パリで実施された「アフガニスタン 悅久の歴史展」への出品物を中心に、先史時代から近代まで多様な文化と近年の戦禍によってアフガニスタンから流出した文化財や現地文化財の悲惨な状況を伝える映像や写真などを熱心にご鑑賞された。

『鑑賞後催された両陛下とのご懇談では遠山大臣、松浪外務大臣政務官ラヒーン・アフガニスタン情報文化大臣と主催者代表、当日開催された国際シンポジウムのパネリストや招待者の代表者とご懇談された。

大賀 典雄  
ソニー（株）  
北島 義俊  
取締役会議長  
大日本印刷（株）社長



正木直彦（在職1901年  
8月～1932年3月）

### 東京美術学校1932年 校長 正木直彦 最長不倒の在職31年

#### 佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『〈日本美術〉誕生—近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術—美の政治学』

実際の人となりは、いたって温厚で公平だったらしい。退任のあいさつでは、「際立つたことが嫌で」「何でも事柄をなだらかに済したい性質」から、在任が長くなったと控えめに話している。そんな感じだから、二代目校長の岡倉天心（一八六二～一九一三）のよくな、人間味たっぷりの逸話もほとんどない。が、しかしこの二人、じつは一八六一（文久二）年生まれの同い年だ。生きた時代さえ違う感じの二人だが、早熟天才、大器晩成。それなのに、時代を背負う自分の役割をはつきりと自覚していた点では、たしかに共通していたかもしれない。

明治維新（一八六八）年以降、一九世紀後半の美術界は、欧化主義・国粹主義といった政府の方針をめぐつて、西洋系と伝統系、それぞれのなかでの新旧両派が熾烈な競争をくり広げていた。二十世紀に入ってようやく、両者は共存へと向かう。その歴史を美校では、前者の一九世紀を天心、後者の二〇世紀を正木が背負つた形になつてゐるのだ。だから後者での調整役としての正木の性向は、それ 자체が時代的な役目を背負つていて。在任が長くなつたのも、それが求められたからだろ

う。まだ美校騒動（一八九八年）の余韻がのこる就任早々、辞職した下村觀山の復職を天心に求めたのも、また退任まきわの一九三一年、校内の中心地に天心の銅像を建てたのも、正木だった。そしてもう一点、二人ともに文部官僚出身の校長だったことも共通している。正木は初め小学校教諭をして、それをやめてから東大、文部省に入つたため、天心とは重なつていない。が、立場こそ違え、国家の視点から美術を考える立場にあつた点では同じで、その意味での共感もあつたろう。

実際、正木までの校長は、すべて官僚だった。しかし、つなぎ役の赤間信義（文部省）を経て、一ヵ月後の同年五月、西洋画科教授の和田英作が新校長になつたことは、美校史上の画期となるべきことだつた。教授会が選出し、一方でなお帝国美術院長の職にあつた正木が推薦するという形で、初めて作家校長が生まれたのである。和田は、岡田三郎助とともに長く黒田清輝を補佐してきた人物だ。作家校長といふ意味では、この黒田が最初でもおかしくなかつた。黒田は、正木に勝るとも劣らない美術行政家でもあつたからだ。現職のまま、正木より早い二代目の帝国美術院長となり（初代は森玉外）、貴族院議員にもなつたが、一九一四年にすでに歿してしまった。

この和田英作を最初として、とくに民主化と大学自治が進められた戦後は、学内から学長が選出されていくことになる。

（さとう・どうしん／美術学部芸術学科助教授）



岡倉天心（在職 1890年10月～1898年3月）



黒田清輝（生没 1866年～1924年）



和田英作（在職 1932年5月～1936年6月）

# タイムカプセルに乗つ

1922

幸田露伴は妹の幸田延がいよいよボストンに向けて発つとき、一八八九（明治二二）年、「勵め作曲者、励め作曲者、君の地位高まらすんば明治の新音楽起るべからず。励め作曲者、励め作曲者、君の権利伸びすんば明治の新音楽起るべからず」と勵ました。初の官費音樂留学生として旅立つ妹に「演奏家になるだけではなく、将来は作曲家としても仕事をしてくれるよう、願つて、じるよつに聞こねる。

「西洋文化は受入れるだけではなく、受容した文化を土台として創作する側に立て！」というのは、受容かはじまつた時から日本人の熱い願望であった。しかし音樂学校に、作曲家を生み出す制度が整つたのは、一九三二年（昭和七）四月のことであった。それまでは本科には聲樂部と器樂部しかなかつたが、ついに作曲部が誕生したのである。

その七ヵ月前の一九三一年九月、プリンスハイムが来日した。東京朝日新聞には、「ドイツ樂壇に名を有するクラウス・プリンスハイム氏は去る八日上野東京音楽学校教師として就任した（……）。氏は四十八歳の老成した音樂家で、音樂理論、指揮の他作曲はマーラーに師事し、すごぶる造詣深く、又オペラにも精通している」とある。これまでにない大型の音樂家が来たという記事であった。

プリンスハイムは、たとえば指揮者では金子登、山田一雄、歌手では柴田陸陸、長門美保、作曲家では阿部幸明、平井康三郎など、日本の次代を担う人材をた

幸

田露伴は妹の幸田延がいよいよボストンに向けて発つとき、一八八九（明治二二）年、「勵め作曲者、



プリンスハイム（在職 1931年～1937年）

くさん育てた。

ヨーロッパからすると、世界の東端にぽつんとある日本に来て、プリンスハイムは作曲専攻の学生に何を教えるべきかという問題に直面し、いわば作曲の本家から来た人間として、まずは古典的な和声法を最重要課題にした。せりに、彼は同時代のR・シュトラウスやマークーに至るまで、和声法のすべてを説明することができ、阿部や平井などはともども、先生の授業は「画期的」だったと語っている。

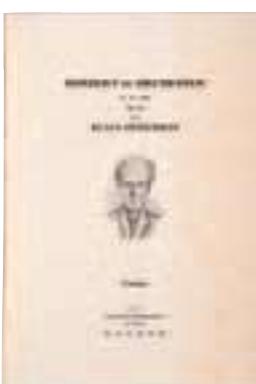
赴任四年後の一九三五年、彼が発表した《管弦樂のための協奏曲》は、音樂學校の学生たちに大きな刺激を与えた。しかし、初演と同時に出版された樂譜の序文で、「日本音樂の直感と伝統と又西歐音樂の形式と表現との正当なる且つ未来ある総合化を目的とした」と高言したこと、物議を醸し出した。東洋風のどベントニックと「バッハ的精神」とが木で竹を接いだように繋

げられている、と批判する記事が相次いた。  
そこには誤解もあったようだが、その後も彼は誤解を拡大するようなことをし続けた。原因は彼の性格にあつた。トーマス・マンの妻になつた力チャは双子の妹で、彼女によれば、兄クラウスは礼儀正しく、物腰が柔らかだというが、実際はたいへんな痼疾持ちであった。プリンスハイムは指揮をしているときも、下手な演奏をするなど、徹底的にこきおろし、「フタ！」と罵ることなど

日常茶飯事だったといふ。

とはいって、彼の音樂への愛、教育への情熱は掛け値のないものだった。この点で彼は、日本で初めてギリシャ・ラテンの根本から教えたラファエル・フォン・ケーベルに似ている。一人とも長い滞日中に、全く日本語を学ぼうとしなかつたが、それでいて学生の教育には、ほかの一切を忘れて没頭した。

（たきい・けいこ／演奏藝術センター助手）



《管弦樂のための協奏曲》作品32出版譜の扉（上）と自筆譜の冒頭部

東京音樂學校1932年

## プリンスハイムと作曲部の創設

瀧井敬子

音楽学（ドイツ・ロマン派、および日本洋樂草創期の研究）。主要論文「幸田露伴と音樂、そして妹の延」「東西音樂の接点—音樂におけるジャポニズムの一断面」「森上外とオペラ」



# ようこそ 大学美術館へ

大学美術館とはどのような施設か——  
まだ知られていないその概要と魅力を  
歴史と沿革から今後の課題まで紹介する。

薩摩雅登(さつま・まさと／大学美術館・助教授)



## 02 理想と現実

大学美術館は実技系国立大学内に設置される美術館という特色を最大限に活かし、学内共同利用施設としての教育研究機関として設立された。理想を高々に謳えば、「日本近現代美術と東京芸術大学の歴史を反映する所蔵作品と、学内の制作現場で日々生産される同時代美術を両軸として、伝統と現代を複合的に交錯させ、新たな価値を創造し、あわせて、大学から社会への情報発信の場となる」ことを基本理念としている。要するに芸大美術館は、所蔵作品を調査研究、保存修復、展示公開、情報公開すること、学内の創作活動と社会を直結させることを活動の基本方針とする学術的・実験的な美術館として設立された。

しかしその一方で、東京の上野に新たな国立美術館ができれば、世間一般からはいわゆる特別企画展、それも大規模な展覧会を期待される。大学美術館としても、開館した以上は美術館の存在を周知させなければならないし、また、生まれたばかりのひよこのような美術館を世界的水準にするためには海外の一流美術館との交流は不可欠である。このような諸事情から、開館から三一五年間ほどは活動の重心を企画展に置いて、地力を養うことを目的としている。大学美術館で、コレクションの展示・情報公開と学術的・実験的な小規模企画展が活動の中心となり、それに大規模な国際展などがバランスよく開催されるには今しばらく時間が必要と思われる。

## 01 歴史と沿革

本学における芸術資料の収集は、東京音楽学校・東京美術学校開校以前の音楽取調掛・図画取調掛の時代にすでに始まっていた。それから一世紀以上を経た今日、東京芸術大学は、国宝級の古美術、近代の絵画・彫刻・工芸品、明治時代の楽器、建築・デザイン図面など、多種多様な約四万五〇〇〇点の芸術資料を所蔵している。これらは、当初は文庫と呼ばれていた図書館に、一九六五（昭和四十）年からは新たに竣工した芸術資料館に収蔵されて、学内の教育研究資料として有效地に活用されていたが、展示スペースが狭隘なために一般に広く公開される機会は少なかつた。

情報公開の時代を迎えた今日、各大学に秘蔵された。



あるいは死蔵されている学術資料は社会全体で有効に活用するべきとして、ユーディアーシティ・ミュージアム構想が提唱された。それに加えて、芸術資料館の貧弱な収蔵設備が貴重な芸術資料の保存には不適として問題となるにいたって、本学も美術館を具体的に構想し、一九九五（平成七）年二月に「東京芸術大学美術館基本構想——上野校地の将来像を素めて——」を完成させた。この基本構想をもとに計画は順調に進み、同年秋に美術館設立が決定、一九九六年九月に建築着工、一九九八年四月に芸術資料館組織を大学美術館組織に拡大改組、一九九九年五月にペースが狭隘なために一般に広く公開される機会は少なかつた。

# 03 建築の特色

美術館建築は基本理念を踏まえて設計され、学内の約一七〇〇m<sup>2</sup>の敷地に地上四階・地下四階、延床面積約八七〇〇m<sup>2</sup>の建築が完成した。

特色としては、①実験的な小規模・中規模展を前提として、明確に機能区分した四つの展示室を持つ（総計約一四〇〇m<sup>2</sup>）。展示室1は展示ケース付きの標準的な展示室。展示室2はスポットライトのみの調光システムによる劇場的空间。展示室3は外光を導入できるホワイトキューブの空間。展示室4は暗転あるいは照度制限を前提とした小規模空間。

② 総計約一六〇〇m<sup>2</sup>の四つの収蔵庫を持ち、展示面積よりも収蔵面積が大きい。③ 美術館の主役は作家でも館員でもなく作品と観客という理念から、一階に観客のエントランスと作品搬入口を配した。このため展示室が地下階と三階に分かれ、全展示室を使用する大きな展覧会には不都合もあるが、そのような企画展・特別展は基本構想では想定していないでやむをえない。

④ わが国の美術館は外見やエントランスホールなどが立派で、バックヤードが脆弱な傾向にあるといふ反省から、収蔵庫前室、特別収蔵庫、資料調査室、X線撮影室、作業員控室などを充実させた。

このように、表面的な見栄えよりも教育研究機関としての実質を優先させた建築だが、実技系大学内の美術館にふさわしく随所に素材にこだわり、例えば、収蔵庫扉の漆仕上げなどは館員のひそやかな楽しみとなつていて。



# 04 取手における展開

太学美術館の取手館は一九九四年秋に竣工・開館した（当時は芸術資料館取手館）。

その頃の取手校地は、大多数の一年生、一部の大学院生、一部の非常勤教官、数名の常勤教官が展開していた草創期で、取手館の完成は校地全体に大きな意味を持つものであった。取手館多目的ホールを会場に、ほとんど教官や学生の手弁当で開催された「卒業制作展 美術学校時代の油彩画」、取手校地非常勤教官展「地の力」、「榎倉康二遺作展」、「東京芸術大学日本画教官展」などの内容は、「一般美術館の小規模あるいは中規模企画展と比較しても遜色のないものであった。しかも入場無料といふこともあって、開催者の情熱が取手市民にも伝わり、ボランティアの清掃や受付が登場するなど、結果的に大学と市民の交流を深めること

に貢献した。

取手館多目的ホールは、先端芸術表現学科が設置されてからは一時的にその校舎となり、さらに今年からは音楽環境創造学科のピアノ練習室のほか、一部は体育授業などにも使用されている。これほど多目的に有効に利用される美術館は全国でも珍しい。

取手館は実は延床面積約六〇〇〇m<sup>2</sup>の美術館として設計されており、現在は収蔵庫、多目的ホール、事務室など、約半分の施設のみが竣工した未完成の状態にある。残りの約三〇〇〇m<sup>2</sup>に研究室、展示室、図書室などが整備されて、美術館としての体制が整備されて初めて、取手に自立した美術と音楽の二学科との連携、市民との交流など、大学美術館取手館としての本格的な機能を發揮するであろう。

# 05 今後の課題と可能性

美術館と名乗つてはいるが、大学美術館のコレクションには、大学という名にふさわしく、絵画、彫刻、工芸などの美術品ばかりではなく、考古学資料、古楽器などの音楽資料、建築模型、建築・デザイン図面など、多種多様な資料が含まれている。しかし、収蔵庫や展示室の設備は美術品の収蔵と展示を目的に作られており、楽器の試演、建築模型の閲覧、図面の閲覧などを求められても、施設的にも組織的にも対応できないのが現状である。また、資料の保存は行え

ても、修復や修理を行うには設備が根本的に不足している。

基本構想にしたがって、第二美術館（M2）、第三美術館（M3）の計画をすすめるならば、図書館（ビブリオテーク）とも美術館（ミュージアム）とも性格の異なる、多彩な資料を保管、修復、閲覧（試演）、貸出しができる、資料収集館（アルキーフ）的な機能を兼ね備えるよう

# 日本画

## 彫刻

たけのうちきゅういち  
竹内久一 (1857-1916)  
じん む てんのうりゅうぞう  
「神武天皇立像」  
1890年 (明治23)  
木 総高297.3cm 像高236.0cm

竹内久一は江戸に生まれ象牙彫刻を学んだが、奈良に滞在し木彫の研究をしている時にフェノロサや岡倉天心と知り合い、東京美術学校彫刻科初代教授として招聘された。この作品では、見事な檜を使用し、彩色の痕が認められないことからも、作者が材質と自らの技法に全てをかけたことがうかがわれる。日本の木彫の伝統を継承する堂々たる立像で、第3回内国勧業博覧会にも出品されているが、戦後は時代の風潮に合わせず長く忘れられていた。



特集 21世紀のミュージアム 大学美術館  
★ようこそ大学美術館へ

## 大学美術館名品コレクション10選

前身である資料館時代より受け継いできた大学美術館の個性的なコレクションの中からジャンルごとに紹介する誌上ギャラリー。

### 「金錯狩獵文筒」

漢時代 1-2世紀  
銅 上径3.55 下径3.5 長25.6cm  
重要文化財

鋳製の中空の金具で、馬車の傘の柄の一部とみられる。筒全体を帯で4段に分割し、山並みや渦巻状の雲気文、多数の禽獣や人物が流麗な金線で表されている。なかでも虎に矢を放つ騎馬人物や鳳凰の文様が華麗である。文様の金象嵌には、中国産とされる純度の高い金が埋め込まれている。朝鮮半島・楽浪（現在のピョンヤン）の出土と伝えられ、1965年中国河北省定州市から出土した金具やMIHO MUSEUM所蔵の金銀象嵌円筒形馬車金具との文様・形状の酷似が指摘されている。

## 古美術

いたえ ちゃくしょくてん ぶぞう たいさじ  
「板繪著色天部像（醍醐寺）」  
平安時代 951年（天暦5）  
板繪着彩 各79.9×21.5cm  
重要文化財

この板繪は、醍醐寺五重塔の8面連子窓の羽目板のうち、西側北面の一部である。そこには胎藏界外金剛部院西方諸尊の10尊が描かれていたが、そのうちの2枚4尊分が本学の所蔵となった。上段に水天と毘紐天妃を、下段には鼓天と樂天を配している。創建当初のまま補修を受けておらず、剥落も激しいが、下書き線や地塗りが露出し、作画過程を知る良い資料となっている。唐風から和風へと移り変わる平安中期の基準作例としても貴重である。





横山大観 (1868-1958)

「村童観猿翁」

1893年 (明治26)

絹本着彩 110.5×180.5cm

東京美術学校日本画科第1期生  
横山大観の卒業制作。花鳥風月、  
歴史、仏教説話などに題材を求める  
た作品が多い当時において軽妙洒脱な作品といえる。この画題について大観は『大観画談』に、「あ  
の作品に描いた猿回しの翁は、橋  
本（雅邦）先生に見立て、村童  
11人は、(日本画科) 同期の11人の  
幼な顔を想像して描いたもので  
す」と記している。

橋本雅邦 (1835-1908)

「白雲紅樹」

1890年 (明治23)

紙本着彩・掛幅装 265.8cm×159.3cm

重要文化財

第3回内国勧業博覧会出品作品。  
画面下半分に見られる正統水墨画  
のような厳格な画面構成と、上半  
分の色彩配色の妙による空間表現  
が対比されている。作者の力点は  
題名からして言うまでもなく上半  
分で、白雲の上部には金泥で金雲  
を描き、緑樹の下には金粉をまく  
など、新しい空間表現を目指して  
細かな創意工夫を凝らしている。  
雅邦は岡倉天心に共鳴して日本画  
の革新を試みていた。



ラグーザ、ヴィンチェンツオ

(1841-1927)

「日本婦人」

1880年 (明治13)

ブロンズ 高62.1cm

石膏原型 (重要文化財) より鋳造

1875年、ラグーザは日本政府  
からイタリア政府に委嘱された彫  
刻教師選抜試験に合格、翌年来  
日し工部美術学校の彫刻科を担当  
する。それまで日本に造形美術と  
しての彫刻という概念はなく、ラ  
グーザの写実的作風が日本の洋風  
彫刻の出発点となる。本作品は滞  
日中に制作されたもので、若い婦  
人のやわらかな雰囲気を出した佳  
作である。明治14年の第2回内国  
勧業博覧会に出品、象牙彫刻が主  
流だったなか、新しい素材と写実  
性が大いに注目を浴びた。



# 工芸



きんぎよていた  
「錦魚手板」



こいぬていた  
「児犬手板」



すずめていた  
「雀手板」



かわせみていた  
「魚狗手板」



あきくさていた  
「秋草手板」

うんのしょうみん  
**海野勝珉**  
(号 芳洲・東華斎 1844-1915)  
**「彫金手板」**  
1912年(明治45)  
9.0/9.1×12.1×12.3cm

東京美術学校で伝統彫金技法を実習するために使用していた教材。手板と称する。金、銀、赤銅、真鍮など様々な金属を用いて、毛彫、線象嵌、平象嵌、高肉厚、薄肉打出しなど、多彩な技法を盛り込んで、順序よく学べる内容となっている。今日では、明治彫金界を代表する作者の晩年の円熟した技が凝縮された貴重な資料で、大学美術館ならではの所蔵品といえる。



ほたんていた  
「牡丹手板」



まつだこうろく (1896-1986)  
**松田権六**  
「草花鳥獸文小手箱」  
1919年(大正8)  
金沃懸地 蒔絵 平文 蓋裏平目地 身及び側面 潤塗 螺鈿  
15.8×23.5×21.0cm

手箱の内側に大きく口を開けて吼える獅子が描かれており、その咆哮に驚いて逃げ惑う鳥獸が表面一面に描かれている。作者は、漆の上に純金と青金の粉を表面全体に蒔き、漆の乾かないうちに一気に動物の輪郭を針金で作った筆で引っかいて描きあげるという技法で、躍動する動物を描き出した。100点満点で評価された卒業制作で、作者の代表作のひとつ。

# 西洋画

山本芳翠 (1850-1906)

「西洋婦人像」

1882年 (明治15)

油彩・板 41.0×32.9cm

小振りな板に若い西洋婦人が横向きのポーズで描かれている。フランスの文豪テオフィル・ゴーティエの娘、ジュディットの肖像といわれる。画面はなめらかで平滑な下地づくりから周到に準備され、側面の輪郭の美しさがひきたつよう陰影が計算されている。1878年、芳翠は本格的な西洋画技法を学ぶため、フランスのパリ国立美術学校に留学した。本作は輸送船の事故で失った滞在作のうち、運よく残された数少ない作品のひとつである。



原田直次郎 (1863-1899)

「靴屋の親爺」

1886年 (明治19)

油彩・カンヴァス 60.3×46.5cm

重要文化財

靴職人のその性格まで浮き彫りにしたような迫真的肖像画である。ドイツ・ミュンヘンに留学した直次郎の滞欧作であり、彼の代表作ともなっている。陰影の対比が油画特有の巧みな技術を生かして描かれており、平筆を使ったなにげない筆の運びや的確に対象を捉える表現力には、特に卓越したものが感じられる。明治洋画を代表する肖像画としての評価も高く、近年、重要文化財の指定を受けた。



# 開かれた大学

## 東京芸術大学音楽学部 小泉文夫記念資料室

音楽資料の蒐集・整理・保存とそのデータベース化

柘植元一

小泉文夫記念資料室（英語名 Koizumi Fumio Memorial Archives）は音楽学部の一郎館1階の1室を占めています。ここには主として音楽民族学関連の研究資料が多数所蔵されており、その大半は、故小泉文夫音楽学部教授の手によって蒐集されました。著名な音楽民族学者であった小泉教授は昭和五十八年の夏急逝されましたが、遺族の三枝子夫人は亡夫の蒐集になる音楽資料を、すべて若い人たちの研究に役立てて欲しいと音楽学部に寄贈されました。

この貴重な研究資料群を、音楽学部教授会は学部内の研究施設「音楽研究センター」を構成する一資料室に位置づけ、昭和六十年六月六日に「小泉文夫記念資料室」は正式に開設されました。これが小泉文夫記念資料室の発端です。百平米たらずの敷地には、約七百点の楽器、三千四百余枚のLPレコード、千六百六十二本のオープンソーラー・テープを含めた録音資料、五四〇〇余冊の書籍と楽譜、および数千点の写真資料がひしめきあっています。狭いスペースながらもここで私たちちは研究を始め、昭和六十一年度には文部省の特定研究費で全

資料の整理保存の研究を行ない、『東京藝術大学音楽学部小泉文夫記念資料室所蔵楽器目録』（一九八七年）を刊行しました。

大学者の遺品を大切に整理保管することは、それ自体たしかに大切ですが、私はこれを単に一個人の偉業を顕彰する小ぢんまりとした資料室にとどめおかず、むしろ、世界の音楽資料の蒐集や情報交換の研究拠点としてさらに発展させるべきだと考えました。そこで、音楽文化にかかわるあらゆる情報を縦横に駆使して広義の音楽民族学研究をするため、学内に先駆けて「マルチメディア・データベース」を導入したアーカイブズ構築を企てたのです。これこそ所蔵資料が学内外の研究者に活用される道であり、また故小泉教授の遺志でもあると信じるからです。

長い準備期間を経て、平成九・十一年度には、文部省科学研究費補助金によってデータベースのプロトタイプを構築し、平成十一年度からWebで試験公開をはじめました。これは小泉教授が世界数十か国で蒐集した録音資料を対象とする「世界音楽データベース」で、録音に関する文字情報の検索は





写真上段：ジャワのガムラン

下段左：インドネシアの楽器グンデル

下段右：アラブとトルコの音楽で使われるウード

右頁上段右：小泉文夫の胸像と資料室で働く研究員

おかげなど、一部の録音は試聴も可能です。故人の自筆メモなども画像ファイルとして見られます。膨大な録音資料の聴取とデータベース化は今なお進行中ですが、この研究・公開の推進にあたり、文部科学省研究成果公開促進費（平成十三年度）、財団法人ローランド芸術文化財団（平成十三年度）、松下視聴覚教育研究財団（平成十四年度）をはじめ、これまで学内外から多くの研究助成をいただきました。

当資料室の魅力のひとつは、手にとって試奏できる楽器展示にあるでしょう。学外観覧者の大半は、楽器をめぐして来室され

ます。最近では「総合的な学習の時間」を利用して来室する中・高校生が増え、未知の楽器に目を輝かせる生徒たちの姿もまだあります。なおこれらの所蔵楽器図録はWebでも公開しています。

学内外に公開された研究機関として、当資料室の果たす役割は今後ますます広がりを増すでしょう。Webによる情報公開のせりなる充実をめざしながら、世界音楽に関心をもつ方々に、幅広く活用していただけるよう願ってやみません。

（つげ・げんじち／音楽学部楽理科教授・  
小泉文夫記念資料室室長）



# 2002年新卒業生紹介演奏会

前回の美術学部卒業制作展に引き続き今回は音楽学部卒業生による演奏会紹介を紹介する。  
学生生活の成果を披露した、実り多き一夜。



晴れ舞台である本番の演奏風景。ここからアーティストとしての新しい旅立ちが始まる



リハーサルの光景。それぞれに得意の曲目を選んで、練習にも力が入る

# 自由を表現する」とへの挑戦 真部裕

真部裕



左から大曾根浩範（作曲）、小池郁江（フルート）、中島彩（ピアノ）、真部裕（ヴァイオリン）、大隈智佳子（ソプラノ）



「芸大 定期オーケストラ」の一環として催される

私は芸高から芸大へ進み、貴重な青春のほとんどをこの上野公園の奥地で謡歌してきたわけだが、ともあれ七年間に得たさまざまな得がたい経験として私のなかに根づいている。

一九九五年、春、北の大地からバイオリン一本ひつさげて意気揚々と上京してきた私を待っていたのは、猛暑と才能あふれる同輩、先輩方であった。その二つに著しく衝撃を覚えた私は、それらに負けない力をつけるべくわれわれの実技のなかでも、最も重要な位置を占める即興演奏の修業に明け暮れた。そして同じ志を持つ数人の仲間とともに「最高の野暮つたさを追求する」『スネーク』という新ジャンルを創設したのである。なぜスネークという名前が付いたのかは知らない。たぶんれども知らない。きっとだれかを連想したんだろうね。何はともあれ、それが私の音楽の基礎となつたわけである。ちなみに、猛暑とは全然関係ないことにいま気づいたが、ご容赦いただきたい。

大学のカリキュラムにおいては、音楽において最も重要なアドリブ、即興演奏などの授業がなかったのは残念だが、これはおそらく大事なことは自分で学べ、といつ自立心を養うべき措置だったのであろう。それでも、私の場合は恩師である教授がバロック音楽などでの即興演奏などを得

意としており、それらを教わることができた私は非常に幸運であったといえよう。私にとってその教授は最高の師匠であった。彼の指導による、権威ある国際コンクールでの即興演奏の披露などはいまでも最高の思い出として心に残っている。大学にもすっかり馴染んだ私は、その後も我が道を邁進するべく研鑽と活動を続け、アフロヘアでの実技試験、温かい先輩方からの要請によるモヒカンでのコンサートマスター等の怪挙を次々と成し遂げた。充実した学生生活だったと今でも胸を張って言える。たぶん。

季節は移り、そんな私が恩師に多大な迷惑をかけつつもかねて卒業を迎えてよとしている頃、新卒業生演奏会に出演が決まったことを知り、私は耳を疑った。私の音楽が異端であることは学校じゅうで知つていて、芸大の卒業生を代表する立場に私が選ばれるとは夢にも思っていないかったのだ。だが、これはおそらく多くの皆さんが私のスタイル、つまり即興演奏を期待してくれているものと考えた。事実、とある芸大オーケストラの団員の方の「お前、まさか実力で選ばれたと思っていたんじゃないだろ?」と

いう有り難いお言葉もいただき、私は最高の（即興）演奏をするべく決心を固めた。じざ当日は、緊張で足が震えながらもステージに立ち、一音も弾いてないのになぜか「グラボー」と喝采をいただき、七年間の思い出の詰まつた最高のステージを経験できた。今でも思い出すと胸が震える。私は七年間の集大成を披露するすばらしい場をいただけ、本当に感謝の念はつきるところを知らない。

こうして晴れて芸大の門を後にした私だが、後のことば、前人未踏の荒野を歩くよつたもので何もわからないが、漠然とした夢はある。芸大にポップス科を作り、その教授になるのが私の人生の目標である。そして誇るべき後輩たちに私以上に充実した学生生活を送つてもらいたいものである。やはり、後輩たちにはもっと表現といつもの自由なことであり、しろいかな音楽に興味をもつてもらいたい。

## 芸大定期オーケストラ第298回 新卒業生紹介演奏会 2002年6月14日（金）18:30より 東京芸術大学奏楽堂で開催された

●「追分」—— 大曾根浩範作曲  
作曲:大曾根浩範  
指揮:小田野宏之

●フルート協奏曲 — J・イベール作曲  
フルート:小池郁江  
指揮:沼尻竜典

●左手のための協奏曲（ピアノとオーケストラのための）  
M・ラヴエル作曲  
ピアノ:中島彩  
指揮:沼尻竜典

●歌劇「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」「かわいい坊や」  
G・ブッチーニ作曲  
ソプラノ:大隈智佳子  
指揮:田中良和

●ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47  
J・シベリウス作曲  
ヴァイオリン:真部裕  
指揮:田中良和

たとえば私の弾くよつた下品なクラシック音楽といつものもあるんだよ、みたいな……。  
(まなべ・ゆう／音楽学部器楽科) 2002年卒業生

# 秋から冬への大学美術館 2002.11>>>2003.2

## 鍛金 伊藤廣利の世界

本郷寛

工芸の伝統的技法と精神に裏付けられた作品



霞鍛金銀象嵌「神庫」 鉄、真鍮、金銀象嵌 27×60×28cm

課程を修了されました。引き続き工芸科鍛金研究室の一員になられ、亡くなられる一九九八年まで本学で教育と研究に携わってくださいました。なかでも、一九八四年には工芸科鍛金研究室より美術教育研究室に移籍され、特に工芸教育に尽力されてくださいました。

先生は、金属工芸作家として日展を中心に行なわれ、工芸の伝統的技法と精神に裏付けられた優れた作品を数多く制作されました。そして、金属工芸の世界で、主に鉄を使った鍛造の作品で、精神性の強い独自の世界を示されています。また、その作品の質と技量は広く国内外を通じて高く評価されています。

この度、一九九八（平成十）年十二月に急逝されました美術教育教授伊藤廣利先生の遺作展「鍛金 伊藤廣利の世界」が、十一月七日（木）から十一月二十四日（日）まで、大学美術館陳列館で開催されます。先生は一九五九（昭和三十四）年工芸科（金工）に入學後、鍛金を専攻されました。そして、一九六五年には、本学に大学院が設置された第一回田の大学院生として修士（教授）

本展では、こうした生涯を通して残された作品群のなかから、約八〇点の作品を展示する計画です。そして、鍛金の技法が創り出す優れた金属造形の美しさと、工芸家・伊藤廣利の精神世界が展覧できるよう準備を進めております。また、制作を通して培われる人間性を大切にしてこられた先生の美術教育観を感じとれる展覧会をめざしてあります。多くの方々にご覧いただけることを願っております。【美術教育研究室・工芸科鍛金研究室共催】

（ほんじゅう・ひろし）美術教育研究室助

鶴と同時に、一箇所、豚、絵画衝動、等などこれらが展覧会の構成上どんな位置と意味をなしてゆくのかいまだ流動的である。

東京芸術大学美術学部絵画科。このたび退任する教師は絵画科に属している。絵画が大学構制にも位置づけられた順序、即ち芸術－美術－絵画という類概念の流れの下位末端に置かれているのは理由のあることだ。下方にあっても上位を受けて立つ、ということである。他の種のものではどうはゆかない。美術の他の種のものは概ねモノに触れ、変形、加工する。しかし、絵の態度はひたすら眼前のものを受け入れるか触ることはない。他の種の制作物をも眼前のモノとして引受けける。触れることなく写す。それは作ることではない。また作らないことでもない。生まれ、現わしめるようにすることもあり、その為にはモノには直接、手を触れず間接的に遠隔地からの操作が技法として発明される。

山手線は、水平に大きな環をなして東京中心部を区切り取り、円循環し、東京湾の展覧会を企てるにあたって、いくつのかの言葉が無秩序に頭上を旋回している。それは、紫を塗る、中、犬吠崎、西、不思議の世界を企てるにあたって、いくつのかの言葉が無秩序に頭上を旋回している。忍池、夏、山手線、絵画場、紫で還元、

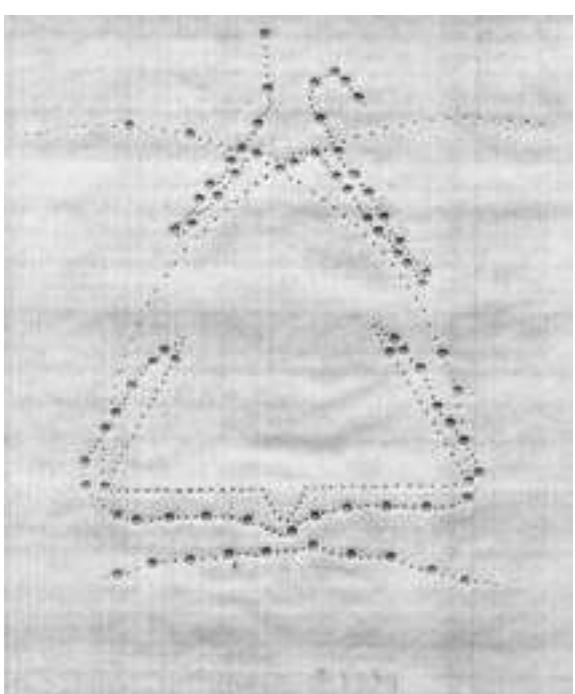
の水面が作る海岸の円弧と接する。美術館のある上野公園は高地の水平な拡がりで、しかも山手線が作る環の水平位より高いところである。

不忍池は山手線の円運動の内に抱かれて同心円をなし、外環の岸は上野公園の麓に接している。池の水は都市の地表の揺れを測る水準器となっている。

美術館の床面もこのよつた多層の水平面の一部である。といふことは今回の企画が美術館にそのよつた意識を与えてようとしていることでもある。

レモンティーを想像してみよ。東京、山手線、不忍池は、レモンの環切りを浮かせ、受け皿に載ったティーカップのようではないか。

航空機が着地するように、また飛行艇が湖面に着水するように、或はベースボールが着陸、着水するように、そしてこの美術館の水平面に仮想した地表、薄い移動式絨毯のような地表に、レモンティーに浮くレモンの環のような地表に、それらは微かに浮かびながら滑り込む。すべては地表



「右手と左手の間の正三角形」 17.5×14cm

## 二箇所—絵画場から絵画衝動へ— 中西夏之

無秩序に旋回するいくつかの言葉……

中西夏之

上に在るのではなく、単に位置している。即ち、地表に触れる事なく隣接している。それは自然のように、絵画を響かせるための振舞いの場であろう。それは当り前すぎるくらいに素朴であり基礎的である。

遠くに巨大なものが近くには微細なものがある、というわけではない。非常に微細なものは遠くにもあり、近くにもある。近くと遠くは微細なものによって繋がっている。響かせるとそのための遠隔操作であろう。

ここでは微小のモノ、それらの単位、スケールを感じさせるものも置かれるだろう。そこでは紫色が使われるであろう。緑色も

あるであろう。それらは瞬きを拒否した由の強さ、包容性、眩しさのためのものとなるであろう。

それを如何に伝えよつとしているか、とう仕事はこの現代社会に「優しさとは」、「リアリティある感動とは」を問い合わせ確認する作業であると言える。

そして今回の展覧会はそれを確認できる

展覧会といふ。新作の陶器造形による空間照明インсталレーション・映像作品・グラフィック作品から旧作の版画・コマーシャルフィルムまで全四〇点の展示となる。(みのづら・しょうじち／美術学部デザイン科助教授)

# BREEZE(ブリーズ) 宮下安弘

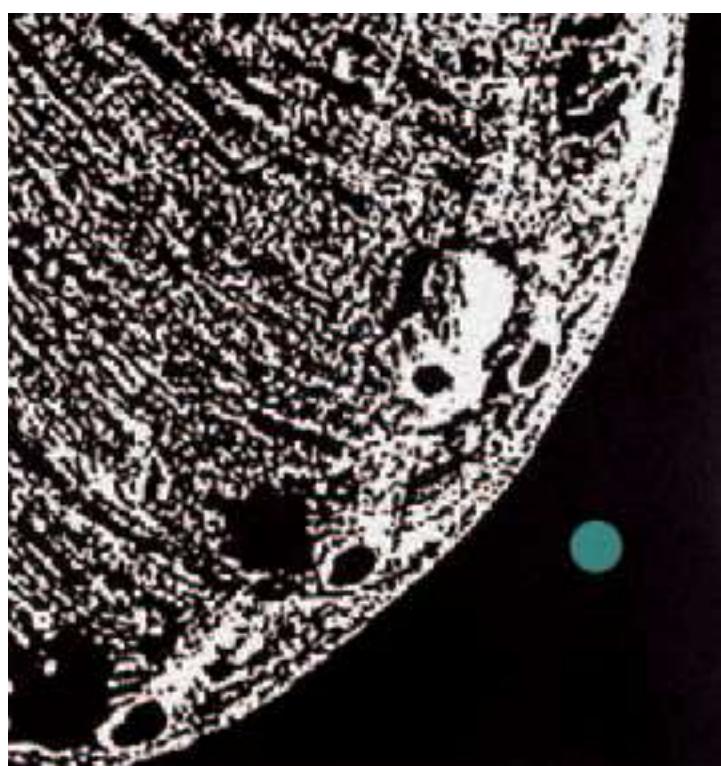
「優しさ」「物を見る真摯な目」とは何か 箕浦昇一

「豊饒なる空間の造形」を目指し、それをどう伝えるかを創作活動の原点としてきた宮下安弘教授の退官記念展である。

造形家として、さらに教育研究者としてその創作領域は、グラフィックデザイン・スペースデザイン・コマーシャルフィルム製作・純粹映像作品・陶器造形と多岐にわたり、その時に変身・変貌を重ねる氏の

多才さに改めて驚かされる。しかし、結果を生み出された物には「一貫した確かなもの」が流れている。やがて作品を見ているうちにそれは「優しさ」であり、「物を見る真摯な目」であることに気付く。そしてこれが人々に「安らぎ」と「リアリティある感動」をもたらすと言えよう。作者が目的とする「豊饒なる空間の造形」そして

紫色色材  
白色砂状アルミニナホワイトモランダム  
黒色砂状ケイ素—カーボランダム  
鋼小球8mm  
その他 絵画、ドローイング等など。  
(なかにし・なつゆき／美術学部油絵科教授)



「遊」リトグラフ+シリクスクリーン

## 展覧会予定

(2002.11~2003.2)

### 大学美術館本館

開館3周年記念  
「ウィーン美術史美術館名品展～ルネサンスからバロックへ～」  
12月23日（月）まで 入場料1300円

退官記念展  
『二箇所—絵画場から絵画衝動へ—中西夏之』  
『BREEZE（ブリーズ） 宮下安弘』  
1月9日（木）～1月26日（日） 入場無料

第51回卒業・修了制作展  
2月21日（金）～2月26日（水） 入場無料

15年4月開催展覧会予定  
（仮）日本近代美術展  
4月3日（木）～5月11日（日） 34日間

### 陳列館

（仮）大学院美術研究科博士後期課程研究発表展  
12月～2月の間  
入場無料

伊藤廣利遺作展  
「鍛金 伊藤廣利の世界」  
11月7日（木）～11月24日（日） 入場無料

### 取手館

美術学部取手校地創作展  
12月7日（土）・8日（日）  
入場無料

※開館時間は、いずれも10時～17時。  
月曜日休館。ただし月曜日が祝日の場合、開館することがあります。

※展覧会の名称・会期については、変更することがあります。

※本学には駐車場はありませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※展覧会についてのお問い合わせ  
東京芸術大学大学美術館  
Tel.03-5685-7755  
NTTハローダイヤル  
Tel.03-5777-8600

※展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。  
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

# 秋から冬への奏楽堂 2002.11>>>2003.2

## オルガン+αシリーズ

「場」と結びつき、「場」に供せられるための音楽

鈴木雅明



「オルガン+αシリーズ」より ©竹原伸治



「オルガン+αシリーズ」より ©竹原伸治

きもの。あるいは豪華やかな宮廷の真っ白な建物の一端を占める礼拝堂に鎮座すべきもの。オルガンを連れ出すことが叶わぬなら、ここで演奏するに際しては、何とかオルガン音楽が生まれた「場」をもつとここに引きずつくることはできないか、と、夢見たのでした。

それが、オペラ科の国松さん（演出）の協力で、ひとつのかたちで実現しました。

オルガンを演奏する時には、ただ虚しく横たわる巨大なステージに、地かすりを敷き柱を立てるだけでも、そこにはある種の「場」が演出されます。しかし、それだけでなく、役者の海堂さんとその仲間のお蔭で五月にはブクスヌーフィードやシニコットガーベが登場しましたし、六月には中世の民衆が現れました。また九月にはヴェルサイユ宮殿の貴族が訪れ、十一月には、バッハの妻たちの思い出話を聞きながら、オルガン音楽の真骨頂を味わっていただきたいと考えています。

この企画は、立派な現代風コンサートホールに対する、ささやかな抵抗の試みなのです。まだコンサートホールが存在しないなかで頃の音楽を、如何にしてコンサートホールで命を与えるか、これは、淡水魚を海水の中で生かすより、はるかに難しいことには違いありません。

（すずき・まさあき／音楽学部古楽科・オルガン科助教授）

日本で演奏するヨーロッパ音楽のなかでオルガンほど扱いにくい分野はないでしょう。というのは、コンサートホールにオルガンを建造するという発想自体が、オルガン文化の歴史に大きく逆らったことだからです。オルガンに限らず一八世紀までの音楽は、決して抽象的な存在ではなく、非常に具体的にある種の「場」と結びつき、その「場」に供せられるために書かれて来たのです。「場」は決して「場所」ではありません。むしろその音樂の「目的」とでもいべきもの。その音樂が本来供せられるところの「機会」あるいは「儀式」。また、その演奏に際して聽衆と演奏者が共に置かれているはずの視覚的な「環境」、あるいは「空氣」。それが時として音樂の内容にも深く関わっているのです。教会であれ、宫廷であれ、そこには必ず「場」があるのです。

一九世紀以降に発展したコンサートホールというものは、このような発想から決定的に一線を画すものです。どんな種類の音樂であっても、一様に同じ環境のなかで抽象化し、音樂的要素のみを抽出して聽衆の前に提示する。これが、コンサートホールの発想だからです。

私たちの新奏楽堂に、オルガン建造の鬼才アルミニエとヨーネークな音響設計によって、すばらしい環境が完成した時、私は、この

## 芸大定期邦楽 第六五回演奏会

未来への視野に立つ伝統芸術の生き様

野村四郎

邦楽は本年度より、学校音楽教育において必修になり、その必要性が大いに叫ばれています。邦楽定期演奏会は本年十二月で第

邦楽定期演奏会は本年十二月で第

邦楽は本年度より、学校音楽教育において必修になり、その必要性が大いに叫ばれています。邦楽定期演奏会は本年十二月で第

邦楽は本年度より、学校音楽教育において必修になり、その必要性が大いに叫ばれています。邦楽定期演奏会は本年十二月で第

## 奏楽堂演奏会予定

(2002.11~2003.2)

### 定期演奏会・特別演奏会予定

11月 2日 (土)

#### 「うた」シリーズⅡ

#### 奏楽堂に響く声2002

第4回 Pleasure of Vocal Ensemble—重唱の楽しみー

17:00開演 1,800円 (自由席)

[曲目] 《サルヴェ・レジーナ》より (ペルコレージ)

《タベの音楽》より (ロッシー)

《スペインの歌遊び》より 『最初の出会い』ほか (シューマン)

《二重唱曲集》より 『渡り鳥の別れの歌』ほか (メンデルスゾーン)

四重唱曲 《愛の歌》より (ブルームス) ほか

[出演] 伊原直子、鈴木寛一、多田羅迪夫、近藤政伸、佐々木典子、日比啓子、平松英子、大学院学生ほか

東井美佳、奥千歌子、鈴木真里子、高木由雅、千葉かほる、山口佳代 ほか (以上ピアノ)

11月 5日 (火) 8日 (金)

#### 室内楽特別演奏会 ～ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏シリーズその4～

18:30開演 1,300円 (自由席)

第1夜 (5日)

[曲目] 弦楽四重奏曲 変ホ長調 Hob. II:6 (作品1-0)

ピアノ三重奏曲 変イ長調 Hob. V:14 ほか

[出演] クワルテット エクセルシオ (Vn.西野ゆか、遠藤香奈子 Va. 吉田有紀子 Vc.大友 肇) Pf.青柳 晋 Vn.玉井菜採 Vc.河野文昭

第2夜 (8日)

[曲目] 弦楽四重奏曲 ニ長調 Hob.III:42 (作品33-6)

弦楽四重奏曲 ハ長調 Hob.III:72 (作品74-1)

ソプラノとオーケストラのための

カンタータ

《哀れな我ら、哀れな祖国》 Hob.XX IV:a:7 ほか

[出演] クワルテット リベロ (東京芸術大学大学院生)

(Vn.野村良子、徳永友美 Va. 中島悦子 Vc.中島恵子)

Sop.嶺 貞子 Sop.馬原裕子

Sop.辻 由美

オーケストラ：東京芸術大学教官と大学院生

11月10日 (日)

#### オルガン+αシリーズ 第4回

15:00開演 1,800円 (自由席)

《バッハの思い出》 ふたりの妻、天国でバッハを語る

[曲目] モテット 『主に向かって新しき歌を歌え』

プレリュードとフーガ ハ長調

パッサカラリアとフーガ ハ短調

アンナ・マグダーレーナの音楽帖

より (以上J.S.バッハ) ほか

[出演] 廣野嗣雄、鈴木雅明 (オルガン)、

鈴木雅明 (チェンバロ) 三宮正満 (オーボエ)、

前田リリ子 (フルート)、野々下

由香里 (ソプラノ)、芸大声楽

アンサンブル

11月22日 (金)

### 芸大定期 合唱・オーケストラ第301回

18:30開演 1,800円 (自由席)

[曲目] 『ドイトレケイエム』『アルトラ

ブソディ』 (J.ブラームス)

[ソリスト] 永々 京子 (ソプラノ)、原田

圭 (バリトン) 『ドイトレケ

イエム』

木下泰子 (アルト) 『アルト

ラブソディ』

[指揮] ハンス=マルティン・シュナイ

ト

[合唱] 東京芸術大学音楽学部声楽科学

生

[管弦楽] 東京芸術大学管弦楽研究部

(芸大フィルハーモニア)

11月29日 (金)

### 芸大定期 オーケストラ第302回

～学生オーケストラ演奏会～

18:30開演 1,300円 (自由席)

[曲目] 交響詩「ドンファン」作品20

(R.シュトラウス)

交響曲第3番ヘ長調作品90 (ブ

ラームス)

[指揮] 佐藤功太郎、小田野宏之

[管弦楽] 東京芸術大学音楽学部学生オ

ーケストラ

12月 3日 (火)

### 芸大定期 邦楽第65回

17:30開演 1,800円 (自由席)

[曲目] 邦楽団子 「三番叟組曲」

日本舞踊・常磐津「千代の友鶴」

能楽「土蜘蛛」

箏曲「大和の春」

尺八「創作 彩画」

長唄「雪獅子」

箏曲「創作 瑞祥飛天 ～奏楽

堂開館記念曲～」

[出演] 各講座の教官及び学生

12月 4日 (水)

### 芸大定期 吹奏楽第68回

18:30開演 1,300円 (自由席)

[曲目] ロメオとジュリエット (S.プロ

コフィエフ)

ルスランとリュドミラ序曲 (グ

リンカ)

世界三大マーチ集IV ほか

[指揮] ゲルノート・シュマルフス

[演奏] 東京芸術大学音楽学部管打楽器

専攻学生

12月14日 (土)

### 御徒町中学と芸大生による演奏会

14:00開演 入場無料

[曲目] 未定

[指揮] 未定

[演奏] 御徒町中学校生徒と東京芸術大

学管打楽器専攻学生

1月25日 (土)

### ピュイグ・ロジエ先生追悼演奏会

18:00開演 1,800円 (自由席)

[曲目] オルガン曲

三楽章の組曲 (2曲とも ピュイ

グ・ロジエ) ほか

前奏曲集より 抜粹 (メシア

ン)

ラ・ヴァルス (ラヴェル) ほか

[出演] 今井奈緒子 (オルガン)、佐久

間由美子 (フルート)、吉野直子 (ハープ)、藤井一興 (ピアノ)、向山佳絵子 (チェロ)

ほか

2月12日 (水)

### 芸大定期 室内楽第29回

第1日

18:30開演 1,300円 (自由席)

2月13日 (木)

### モーニングコンサート 第12回

11:00開演 入場無料

[曲目] ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調

(F.リスト)

[ピアノ] 山本佳澄

[曲目] ピアノ協奏曲 第1番 変ホ短調作

品23 (P.チャイコフスキイ)

[ピアノ] 大川香織

2月13日 (木)

### 芸大定期 室内楽第29回 第2日

18:30開演 1,300円 (自由席)

2月16日 (日)

### 邦楽科では定期演奏会開催当初から、同じ舞台を通しての教育」を最重要課題として掲げており、教官と学生の共演という、学生にとって有意義で、貴重な体験を持つ場となっている。このことは、学生諸君の卒業後の演奏活動にも、大いに有益となると思う。

定期演奏会を行っているが、六月では伝統的作品を取り上げ、また十二月にはオリジナルティーのある作品を中心に、プログラムを構成している。今回は、邦楽団子「三番叟組曲」・彩画」・箏曲「瑞祥飛天」～奏楽堂開館記念曲」などの創作作品を始め、箏曲「大和の春」・長唄「雪獅子」の近代の作品に加え、日本舞踊・常磐津による「千代の友鶴」・能楽「土蜘蛛」の伝統的作品を網羅した、多彩なプログラムとなっている。

邦楽科では定期演奏会開催当初から、「同じ舞台を通しての教育」を最重要課題として掲げており、教官と学生の共演という、学生にとって有意義で、貴重な体験を持つ場となっている。このことは、学生諸君の卒業後の演奏活動にも、大いに有益となると思う。

近年邦楽科では、各講座が互いのジャンルを乗り越える、真のアンサンブルの充実を目指しており、その総決算として本年五月には、演奏芸術センター、並びに美術学部のご協力を得て、本学奏楽堂に於いて「熊野の物語」を上演するに至った。このことは邦楽科有史以来の快挙として、特筆すべきことである。

伝統芸術は、兎角「古い」というイメージが強いが、未来への創造的視野に立つて今日に開花してこそ、伝統芸術の生き様であると言えよう。

(のむら・しほう／音楽学部邦楽科教授)



芸大定期邦楽63回演奏会より 能「船弁慶」

特集

# 21世紀の ミュージアム 大学美術館

大学美術館は一九九九年一〇月の開館以来、  
さまざまの展覧会をとおして多くの観客に親しまれてきた。  
教育と表現の場である芸大のなかの美術館が果たしていくべき  
役割について提言を外部専門家にお願いした。  
あわせて過去三年間の歩みをたどり、  
所蔵のコレクションから名品一〇選を紹介する。

# 大学美術館への提言

国立の芸術大学に付属する美術館という特性から、大学美術館に寄せる期待は非常に大きい。美術界の動向、美術館行政に詳しい二人の識者に提言をお願いした。その「意見を受けて、大学美術館館長が、これまでの歩みをたどる。」

## 大学美術館と奏楽堂の役割

辻井喬

明治以来のことだからわが国の近代芸術もすでに長い歴史を持っており、その間の有形、無形の蓄積の非常に大きな部分は芸大に集まっていると思われる。

その芸大に美術館と奏楽堂が作られ、多くの人がわが国の近代芸術の歴史に触れやすくなつたことはとてもいいことだと思う。

かつて西欧の美術館の多くは、あたかもその国の威信を示すかのように、版図の拡大と共に手に入れることができた古代の遺跡や芸術的遺品を現地から引き剥がして一堂に並べるのを性格としたのであつた。それは国公立の美術館ばかりでなく、個人の資産家の資産蒐集を基盤とする美術館、博物館も同じ性格を持っていた。それでも人々の役に立つような形で公開しただけ有益であり、参觀する人たちは蒐集が行われた過程に帝国主義や植民主義の影を感じながらも、「実物」に触れることで、あたかも美の本質を盗み見るような感じで観賞し、そこから多くの芸術的感化を受けたのであつた。しかし、芸大美術館の場合には基本的な性格が違うように私は思う。

周知のようにわが国はあらゆる芸術分野で中国大陆や朝鮮半島、そして南方のアジア諸国から伝えられた芸術を、春夏秋冬の変化の極立つてゐるわが国の気候風土、そこに住む人々の美意識と感性、思想で蒸溜して、独特的の芸術を作ってきた。舞台芸術でも文学でもそれは同じことであった。

そこへ、科学理論、工業技術の面で進んだ欧米の文明が一度に入つて来た時、それまでの反動として伝統芸術の様式全体を否定する動きが起つた。この動きは明治維新の際と、一九四五年神国日本が連合軍に無条件降伏をした時の二度にわたつて発生した。

昭和二十年の敗戦の際は、それまで軍閥官閥が皇国史観をふりかざして本来の伝統を歪曲し、日本の美意識を戦意昂揚に役立つものに作り変えて鼓吹した反動で、広い範囲にわたつて伝統芸術拒否の動きが起つたのだった。国粹主義者、軍国主義者が冒した罪悪のなかでも、この爪跡は長く後まで残つてしまつた。その空白に雪崩れこんで来たのがハリウッド映画に代表される、芸術とはあまり関係



のないドタバタ娯楽であつた。

今日、いろいろな産業国家のなかで、本来の映画が気恵奄々と辛うじて生きのびている国は日本である。ヨーロッパの国の人の中には、文化芸術に関しては、日本はアメリカの植民地になつてしまつたと考えている人も多い。残念ながらこの印象はもつとも頻繁に往来している日本のビジネスマンの、文化芸術には全く関心を持っていないような言動によって加速されてしまった。そして日本に住んでいる人たちさえも、日本の伝統芸術、芸能の中には今日的な意味で世界に発信できるものは少ないのでないかと思うようになりつつあった。それでいて文化交流の際に派遣されるのは能、歌舞伎、浮世絵であることが多いのは奇妙な現象であった。

ここには、伝統的な感性や美意識から切り離された芸術は眞の創造性を持ち得ない、従つて外国へ持つて行けないという法則が働いているように私には見える。

しかし、そうした文化芸術を取り巻く長く続いた混乱のなかでも、孜孜として伝統を掘り下げ、そこに本質的な創造する力を見出し、それを今日に生かそうとする努力は続けられてきた。それに先立つて、それまでわが国に表立ては存在しなかつた西欧の芸術の技法、思想をわが国に移植しようとした開拓者の苦労の積み重ねがあつたことは言うまでもない。これは美術の分野ばかりではなく、音楽や文学においても同じであろう。

芸大の美術館、奏楽堂は、地味ではあつてもそつたわが国の近代芸術が辿つた曲節に満ちた道程を私たちに示し、そのなかから眞の創造へと人々を誘う場になるのではないか。その際、伝統芸術、芸能の側にも、現代の若者たちの意欲を殺ぐような事大主義、権威主義、宗匠主義があつたことを指摘する必要があるかもしれない。

それに加えて、氣懸りなことのひとつは、芸術文化創造について何の見識も持たない一部の経済人や政治家が、ひ

とつ覚えの市場競争主義の導入を主張し、訳が分らないうちに「独立行政法人」なる“制度”を強引に決めてしまったことである。ここでも、一度“流れ”的なものが現れるとメディアを先頭にしてその流れの方向へ雪崩れを打つて動いていくという、わが國流の近代社会の悪い面のようだ。私は思うが、他の機関や設備では果すことの出来ない役割を持つてゐる芸大の大学美術館や奏楽堂のような場合は、市場競争原理主義者の威嚇や非難に脅かされることなく、本来の仕事を積重ねて貰いたいと思っている。今日はわが国の長い文化芸術の歴史の中で、世界に通用する日本ので創造的なものが生まれるかどうかの一番大切な時期かも知れないものである。

## 辻井喬 つじい・たかし

1927年東京都生まれ。詩人・小説家。本名 堤清二（（財）セゾン文化財団理事長）。東京大学経済学部卒業。1955年、第1詩集『不確かな朝』刊行。詩集に『異邦人』（室生犀星賞受賞）、『ようなき人の』（地球賞受賞）、詩集三部作『群青、わが黙示』『南冥・旅の終り』『わたつみ・しあわせな日日』（藤村記念歴程賞）、小説に『いつもと同じ春』（平林たい子賞）、『虹の岬』（谷崎潤一郎賞）、『沈める城』（親鸞賞）ほかがある。近著は小説『風の生涯』（芸術選奨文部科学大臣賞）、評論『伝統の創造力』等。現在『辻井喬コレクション』（全八巻）を刊行中。日本ペンクラブ副会長、日本文藝家協会常務理事、日本現代詩人会常任理事、東京芸術大学大学美術館評議員会委員。



# 刺戟ある場としての大学美術館

陰里鐵郎



## 陰里鐵郎

かけさと・てつろう

1931年長崎県生まれ。女子美術大学教授。専攻は近代美術史。三重県立美術館、横浜美術館などの館長を歴任。おもな著書に『夏目漱石・美術批評』『近代日本洋画素描大系・明治』『日本の印象派』『萬鉄五郎』がある。美術評論家連盟所属。

東京芸術大学の大学美術館は、一九九九年（平成十二）の開館以来、いくつかの、また話題に富んだ展覧会を開催してきて一般的にも高い評価を受けてきたといえよう。考えてみれば、この美術館ほど恵まれた条件や要素をもつて出発した美術館は他にないのではないかろうか。その恵まれた条件を二、三あげてみるとつぎのようなことがいえよう。

(二) 豊かな収蔵品をもつてること。旧東京美術学校から一世紀余の歴史を有し、その量は約五万点ともいわれるが、質的にも秀れた作品が多いこと。(二) 芸術・美術系大学に所属しているために、美術学部関係の全員が美術関係者で、美術のさまざまな分野の専門家を多数擁していること。(三) 歴史、科学の博物館をはじめ、国や東京都の文化施設が点在する文化的ゾーンの公園内に在ること。二〇年余、地方の公立美術館の運営に関わってきたわた

る。

しかし、それだけに難しい問題をかかえているであろうことも充分に推察される。たとえば、大学関係者のほとんど全員が、美術の作家であり、また美術の研究者、批評家であるから、それぞれが豊富な専門知識に基づいた意見をもつていているにちがいない。彼らを美術館の運営や活動に向けてまとめるのは至難のわざにわたくしには思えるからである。だが、これも美術館の側が明確な目的意識をもつて方向性を見定めていけば、自ずと有効で活発な美術館活動が生まれてくる可能性は高いであろう。

大学は、教育と研究の機関であるから、大学の一部である美術館も教育の場として機能することが求められる。美術系大学美術館として最大の責務は、コレクションと展覧会、その両面を通じて学生たちに多様な刺戟を与え、学習や創造の意欲をかきたてるであろう。そのためにはたとえば、学芸員と教官とのあいだで意見交換がなされて共通の問題意識のもとに、大小どのような規模であれ展覧会が組織される、あるいは一点の作品が呈示される。そこに教官、学芸員、学生がつどい活発にディスカッションが行なわれる。集まる教官、学生は、展示されている作品の専門分野の連中とはかぎらない。いわばギャラリー・トークの一形態であるかもしれないが、それが単純な学習といった域を超えた質的に高い討論があり、さらにはジャンルの交流、世代間交流が実現されるにちがいない。こうしたことか日常的に行なわれる場としての美術館であつてほしいな、と思つたりする。いや、もう当然行なわれているとは思うが、拡大され、あるいは深化された形が考えられるようと思えるのである。おそらく芸術大学の特色を生かした創作活動と学術研究とがからみ絡み合つた、この大学美術館でなければできない活動があるにちがいない。

これまで開催された展覧会では、たとえば「油画を読む」展や「油画の卒業制作と自画像」展などがこの種のもので

あつた。この点ではこれらは高く評価されるが、それが現在の学生にどのように受けとられ、刺戟を与えたかには、内容が充実していただけに疑問が残らないわけではない。これはたぶん、各学科、各コースのカリキュラムに関係することかと想像される。こうしたことの打破を期待したいし、また、現代美術、先端芸術表現関係の企画も期待したい。

交流といえば国際的な交流も大学として、また美術館として当然とり組まなければならない事業であろう。これはすでにソウル大学と活発な交流がなされ、学生間交流には単に作品展だけではなく、人的な、あるいは文化として総合的な交換交流が実現しているようである。これは素晴らしいことだと思う。異文化を識り、体験することは、これから日本文化を創造していくうえでも重要なことであろう。大学美術館ということになれば、量的には圧倒的にアメリカが多いようである。東洋文化圏はもちろんのこと、他の文化圏との交流も望まれる。

さる日、「竹内久一と石川光明——明治の彫刻」展を訪れた。〈開催にあたつて〉の文のなかに「芸大美術館の企画としても当を得たものであろう」と記されていた。わたくしもそう思う。まさに、こうしたものこそが芸大美術館でなされねばならない企画である。前期の油画関係の企画展もそうであったように。美術館は、単なるイベント会場ではない。とりわけ大学美術館の場合はそうである。厖大な作品と資料を有する芸大美術館である。文化史的、美術史的価値を有しながら沈黙し、眠っているものも少なくないであろう。それらを発掘し、学芸員を中心として学内外の研究者と連携しながらそれらをほんとうに生かすことが求められる。

もう一つ付けたせば、会場の制約はあるが小規模でもいい、選出された作品による常設コーナーが欲しいと思う。

# 〈提言〉に答えて

竹内順一

東京芸術大学の大学美術館について考えるとき、母体である東京芸術大学を指いて語ることはできないでしょう。芸大はまず何よりも、芸術教育、芸術表現の実践の場としてあります。芸術における教育、表現を考える場合、過去を振り返り伝統を再検討することがたいへん重要になってしまいます。明治時代に美術学校、音楽学校として設立された芸大の長く豊かな歴史は、そのような作業にはもつとも恵まれた施設と言えるでしょう。

大学美術館は、芸大に属し、芸大の教官・学生だけではなく、広く一般の方に向けて開放された美術館です。この一〇月に三周年を迎えたばかりのまだ新しい美術館ですが、背負っている歴史や他の美術館にはない特殊性という面からも、担うべき課題や果たしうる可能性は、非常に大きいものがあります。

これまでの歩みの中で、大学美術館の歴史とオリジナリティにもとづく展覧会をいくつも開催してきました。たとえば昨年の「デザインの風DESIGN

SPIRIT OF JAPAN—生活の用・生活の美」展（二〇〇一年一〇月～十一月）は、たんに日本の意匠やデザインの歴史をたどるだけではなく、デザインをとおして日本美術の意味、ひいては生活文化を省みようというユ

ニーハイな展覧会でした。

今回「藝大通信」第四号の特集にあたって、お二人の先生からは非常に刺激的なご提言をいただきました。

辻井喬さんからのご提言は、大学美術館には日本の「近代化」の功罪を見つめ直すという大きな使命がある、と受け止めました。日本の近代美術史の「映し鏡」ともいってべき東京芸術大学、そこに付属する大学美術館が、机上の論議ではなく実践的に近代化の意味を追究しろという励ましでもあると思います。音楽学部の奏楽堂とともに、この二つの施設は、日本人の芸術的歩みを考える上で、格好の場所であることを私たちは自覚しなければなりません。また、辻井さんが触れられている、国立独立行政法人化の問題も、日本の近代化の隠れた部分を指摘されているのだろうと思います。国立とうパブリックな組織として、これからなしうること、変わらなければいけないことが何なのかが、いまこそ問われているのでしよう。

陰里鐵郎さんからの、教官と学生とのディスカッションについては、痛いところをつかれたという思いです。といふのは、大学美術館は、「発信」するばかりで、フィードバックについてはじゅうぶんではないからです。「双方の場」をつくることに努めたいと



「デザインの風DESIGN SPIRIT OF JAPAN—生活の用・生活の美」2001年10月6日～11月25日

思います。

大学美術館はかつて資料館という名稱でコレクションの保存が中心で、専任の研究者がいない組織でした。正式の美術館として発足するにあたっては、研究施設としてもよりよく機能するよう、組織の充実がはかられました。年間の入館者数が約二〇万人というギャパシティ、施設のもつているハードの面から、各地方にある県立美術館と同じくらいの規模だと思います。これは、多くの観覧者の収益を必要とする大規模な国立博物館と、収蔵品を中心とする個人美術館の中間に位置づけられ、実験的な展示を可能にする利点をもっています。

二〇〇〇年一〇月から一一月に開催した「間一二〇年後の帰還展」は、海外や国内の専門家筋からたいへん高い評価を受けました。この展覧会は、一九七八年にパリ装飾美術館を皮切りに、その後欧米を巡回

し好評を博した“MA ; Space-Time in Japan”（「間」—日本の時空間）展を、二〇〇年ぶりに当時の企画者でもあつた磯崎新氏によって再構成したものです。このように集客面もさることながら、創造の現場にある美術館として、内容に対する自己評価はもちろんのこと、他の美術館や関係各筋からの評価を踏まえて、これからも“見えない美術館力”を身につけていきたいと思います。

三周年を迎えた大学美術館ですが、一年目は存在感を示す展覧会をということで「芸大美術館所蔵名品展—近代日本美術の原点」で開館を飾りました。二年目は「日本画の一〇〇年展」をはじめ普及型の企画展を、三年目は問題追究型をテーマに模索を重ねながら歩み続けています。

これからも大学美術館に忌憚のないご意見をお寄せいただきたいと思います。



竹内順一

たけうち・じゅんいち

1941年神奈川県生まれ。66年東京芸術大学美術学部芸術学科卒業（工芸史専攻）。1966年五島美術館学芸員に就任。90年学芸部長。98年より東京芸術大学美術館学芸企画研究室教授。2002年より大学美術館館長。



「間一二〇年後の帰還展」2000年  
10月3日～11月26日

